

モード Mode Mode は語る

中野 香織

桜の時期になるとサクラの香りをうたう香水やバス製品が続々登場する。といっても西洋のチェリーブロッサムに近いものが多い。現実の桜にはほとんど香りが無い。

海外ブランドが作る「サクラ」の香りにしても、彼らから見た桜のイメージに基づき創作されたものである。やさしさ、かれんさ、切なさ、はかなさ。これを表現するため、ローズを基本に柔らかく軽やかに仕上げていることが多く、ボトルにも香水にも薄いピンクが使われる。

この定番イメージにまったく別の解釈を持ち込むのが、Scentopia代

サクラ・マグナの香り



堂々としたサクラ・マグナ

表の山根大輝さん(29)が手がける「サクラ・マグナ」である。山根は楽天とアクセントでコンサルタントをしたあと、独立調香師に師事して香水ビジネスに参入し、2020年5月にパーソナライズ香水ブランド

素材生かした力強さ

「リベルタ・パフューム」を立ち上げた。サクラ・マグナは初のプレタポルテ(既成)香水となる。

「偉大なる桜」を意味するネーミングと紅紫色の香水、堂々としたボトル。香りの中心はジャスミンアブソリュートとイリスアブソリュートで、ジャスミンには重たく動物的のところさえある。山根の桜観にもはっとさせられる。「満開の桜は、決して弱々しいイメージではない。むしろ力強いし、夜桜が群生している光景は、こわいと思うことがある」

上質な香料の素材感を大切にすることも、西洋と一線を画すアプローチ

である。フランスの香水は、素材を複雑に配合して何が使われているのかわからないようにする。山根の香水は素材を生かす。フランス料理と日本料理の違いのようだ。

上の世代は「香害」を嫌い、無臭化に躍起になっていたが、いまの20代は香りに対して否定的な偏見が少なく、上質な香りを積極的に楽しみたいという需要が多いと山根は語る。作り手に若い男性が増えていることも興味深い。Scentopiaには、29歳の山根を筆頭に28歳、26歳の男性調香師がいる。固まったイメージに目を曇らせることなく、自分が感じるありのままを臆せず発信する姿勢やビジネスを冷徹に語る言葉は、「こわくて強い」、次世代日本の香りまで感じさせる。(服飾史家)